様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ９ 月 １４ 日現在

機関番号：３４５０６
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2019
課題番号：１６Ｋ０３１４７

研究課題名（和文）中世イタリア半島における抵抗の政治文化と社会

研究課題名（英文）Society and Political Cultures of Resistance in the Italian Peninsula in the Middle Ages

研究代表者
佐藤　公美（Sato, Hitomi）

甲南大学・文学部・教授

研究者番号：８０６４４２７８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、14世紀イタリア半島の広域的な抵抗運動と反乱におけるローカルな現実と地域を超えた広域的展開の相互連関を、マルケ州のフェルモの事例で検討した。八聖人戦争期のフェルモの反教会国家反乱の事例は、ローカルな利害とインター・リージョナルな利害が「移動する傭兵隊長」という人間の内に絡み合い、反乱の帰趨を決定したことを示している。さらに14世紀に都市コムーネは教会国家が没収した反乱者の財産の購入を行うことによりフェルモの極度に分散的なコンタードへの都市の統制の拡大を試みていた。しかしこの事は教会国家、都市、地域共同体、中小領主の利害の錯綜を一層複雑にすることとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
中世イタリア史研究は都市国家や地域・領域国家を枠組みとすることが多く、地域を超える広域現象と各地域の現実の接合に困難があった。本研究はこれを克服し、広域的反乱において地域の具体的現実がいかに政治的行為の広域化と関連したかを検討した。これによりイタリア中世史のみならず、反乱と抵抗運動という歴史的現象を各地域・各時代で理解し、人間社会の政治的行為を考察するための貢献ができると考える。また本研究の対象の14世紀後半マルケ地方の歴史研究は日本にはなく、特にフェルモの研究は海外でも数少ない。本研究はこれまで十分に知られていなかった中世後期マルケの政治史をイタリア半島の政治文化史に結合しつつ検討した。

研究成果の概要（英文）：This project analysed the interaction between the local instances and inter-regional development in revolts and resistance movements in the Italian peninsula in the 14th century, providing Fermo's case in Marche. During the time of the War of the Eight Saints, Fermo also experienced a revolt against the church, followed by the signoria of Rinaldo da Monteverde, the condottiere of the Florentine-Visconti alliance and an exile from Fermo as well. Fermo's case demonstrates how local and inter-regional interests were entangled in the migrant condottiere and determined the course of revolts. On the other hand, the city commune tried to expand its control in Fermo's extremely fragmented contado, purchasing rebels' properties confiscated by the papal authority. However, this further complicated the intertwined interests between the papal state, cities and local communities, and the small and medium lords.

研究分野：中世イタリア史

キーワード：中世の抵抗　反乱　マルケ　フェルモ　教会国家　14世紀　八聖人戦争　中世イタリア史

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

１．研究開始当初の背景

本研究開始当初の背景には、2000 年代以降中世民衆反乱への関心が研究者の間に再興してきたことがあった。S.コーン Jr.による『自由の切望－1200 年から 1425 年の中世ヨーロッパにおける社会的反乱の政治。イタリア・フランス・フランドル』がその代表的研究の一つである(Cohn, Jr., 2006)。コーンは民衆の抵抗を日常的・非政治的なものとする見解を批判し、前近代の「政治的」反乱の広範な存在と変化を分析した。コーンは、1200－1425 年の 1112 件におよぶ事件を年代記史料から丁寧に拾い上げ網羅的に考察し、前近代の人々の反乱は決して経済的性格のものに限られるのではなく、「政治的」反乱が広範に存在したと結論づけた。

その一方、『自由の切望』はイタリアとフランス・フランドルの比較を行い、地域による差異を強調した。そしてフランスでは反乱が広範な連携に発展しえた一方、イタリアでは領域レベルのものにとどまったとしている。その要因としては、第一にイタリアでは都市コムーネが周辺の農村を支配し、市民と農民の連携が困難であったことが指摘されているが、これには国家としての政治的枠組みが都市国家や地域・領域国家であり、これらの地理的広がりを超えることが難しかったことも併せて考えられるだろう。いずれにせよ、イタリアでは広域的な反乱は「例外」として位置づけられているのである。

しかし、地域的差異に着目すること自体は重要であるが、このようなイタリアの政治反乱の理解は妥当であろうか。報告者はこれに対して、中世イタリア半島において都市や地域国家を超えた広域的コミュニケーションが、階層縦断的な政治的行為の文化として共有され、国家と地域の枠組みを超えた中世の政治文化圏を形成していたという可能性を考えた。この仮説に到った背景には、政治言語についての中世後期イタリア政治史の政治文化史的展開や、シニョリーアと君主支配の展開を、イタリア半島とヨーロッパ諸国との相互影響関係や、共和国・シニョリーア制・君主国という制度史的形体の差異に還元されない多様な経験の中で捉える動向があった。これらの動向から、中世イタリア政治史を個々の都市コムーネや地域・領域国家を超えた広がりから理解する可能性が開かれたと報告者は考えた。

一方、報告者は本研究開始に先立って、中世イタリアの地域の団体や社会集団の在地的紛争と平和形成の実態から、ローカルな社会を超えた広域的秩序を考察し、その過程で各都市コムーネの支配領域にまたがる広域的な連携とコミュニケーションを生み出したとも考えられる 14 世紀の反乱も扱った。

報告者はこれらの研究を通じて、中世の紛争一般の中に政治的行為を分節化することが必要であるという考えに至った。さらに一部の地域と社会層に限られない政治文化を明らかにする可能性をもったものとして、「抵抗」行為に焦点を当てる政治文化史を構想する必要があることを考え、本研究を開始した。

２．研究の目的

本研究の目的は、中世イタリア半島の政治史を、抵抗と反乱という政治行為を対象として研究することにより、広い意味での文化史的アプローチから政治史研究を行ない、これまで中世イタリア史研究の自明の枠組みとなってきた、個々の都市国家や地域国家を超えて、同時代の現象への諸地域・諸国家の連関と相互関係を明らかにすることである。行為の政治文化史によってこれまでの都市別・国家別の中世イタリア政治史を乗り越え、かつ紛争史一般の中から分節化した政治的行為に焦点を当てることが本研究の第一の目的であった。しかしこのことは地域の固有の現実を捨象することは意味しない。むしろ政治史においてこそ、地域固有の政治史的・政治制度的文脈を考慮することが必要である。本研究は、諸地域が接合した広域的反乱を扱い、地域の具体的現実がいかに政治的行為の広域化と関連し相互に影響を与えたかを検討することにより、上記の目的の達成を目指した。

３．研究の方法

『自由の切望』において、Ｓ・コーン Jr.は中世イタリアの広域的反乱を「例外」として位置付けた。しかし、反乱が「政治的反乱」であるならば、政治史的な具体的文脈こそが重要であり、「例外」と見える現象が当該地域と時代の意義を反映し、より広域的・長期的な歴史的動態を明らかにする可能性がある。そしてコーンの指摘する「例外」こそがそのような事例に該当しうると報告者は考えた。その一つが、1370 年代に地域・領域国家を超えた連携の下、広域的な地域を巻き込んで展開した反教会国家反乱である。

これを対象に、研究文献と最新の研究動向の調査研究、基幹的刊行史料、特に年代記の調査と研究、イタリア現地における古文書館所蔵未刊行史料の調査と分析を行なった。その過程で中北部イタリア各地の古文書館所蔵未刊行文書の調査によって生産性の望まれる対象地域を一定の範囲に限定し、刊行史料分析の結果を併せてより集中的な研究対象地域を厳選した。その結果を踏まえ、対象地域をマルケ州とし、特にフェルモ市とその関係諸都市を中心に扱うこととした。

フェルモには同時代の公証人年代記作者アントニオ・ディ・ニッコロによる『フェルモ年代記』が存在し、反乱とその前後の様子を伝えている（*Cronaca fermana*, 1870）。この年代記の分析と、フェルモ国立古文書館とフェルモ市立図書館所蔵史料を中心とする未刊行史料の調査を進めた。これと並行して中世後期の統治と政治的抵抗を支えた理念についての文献・史料研究と、他地域の事例との比較検討を行った。

４．研究成果

（1）はじめに、『フェルモ年代記』を中心に 1370 年代のフェルモの反乱の詳細を分析し、フィンレンツェ書記局で作成された外交文書等の関連史料と併せ検討した。

1370 年代の反教会国家反乱は、1375 年から 78 年にかけて行われた八聖人戦争と結びついて展開した。この戦争は、半島内における一領域国家としての教会国家とフィレンツェの対立の一つの帰結であった。この時、それまでグェルフィ陣営の中心であり、教皇の最大の同盟者であったフィレンツェが、ギベッリーニ陣営を率いたミラノのヴィスコンティ家と同盟を結び、領域国家としての利害がそれまでのグェルフィとギベッリーニの党派的対抗図式を超えたことを如実に示した。八聖人戦争期はこの意味において、広域的党派によるゆるやかな連携から諸領域国家間同盟への移行の一つの画期であると考えられる。

本研究にとって注目すべきは、八聖人戦争では一領域国家を超えて諸国を巻き込んだ半島スケールの動向が、教会国家領域内外の都市やコンタードの共同体や領主のローカルスケールの動態と結びつき、反乱現象に結実していたという事実である。また、14 世紀後半の教会国家領では、八聖人戦争に先立つ時期にもしばしば反乱が生じており、これらを一連の動きとして解釈することも可能である。であるとすれば地域の現実において反乱を理解する必要があるが、これまでの研究では、14 世紀後半の教会国家と都市コムーネそれぞれの統治機構の相互関係や個別的な実際の動きについて不明な点が多く、それらが反乱に際してどのように機能し、その原因や帰結とどう結びついていたのかについての詳細な検討はなされてこなかった。本研究では、都市フェルモとそのコンタード、及びフェルモ周辺地域を分析対象とし、この問題を検討した。14 世紀後半のマルケ地方の歴史研究は日本では管見の限り皆無であり、イタリア現地を始め諸外国でも数少ない。本研究はこの欠落を埋め、中世後期フェルモの政治史を広く半島の政治史に結び付けることにも貢献しうると考える。

『フェルモ年代記』では八聖人戦争期の現地の動向は比較的詳細に記述されている。この時期の一つの中心となるのが、1380 年に「暴君」として排除され処刑されたリナルド・ダ・モンテヴェルデによるフェルモのシニョリーア支配とその終焉に関する記述である。そこでまずは先行研究も踏まえつつリナルド・ダ・モンテヴェルデに関連する一連の動きを再検討し、フェルモの反乱の意味と特徴を検討した。

リナルドは 1331 年から 1340 年にかけてフェルモのシニョリーア支配を行ったメルチェナリオ・ダ・モンテヴェルデの子である。メルチェナリオの殺害後、一族とともにフェルモから追放され、主としてロンバルディアで傭兵として頭角を表し、ヴィスコンティ家の傭兵隊長の一人となった。このキャリアによって有力傭兵隊長ルキーノ・ダル・ヴェルメの娘と結婚し、一定の地位を築いている。このリナルドが八聖人戦争期にフェルモに帰還し、同市の支配を掌握した。

本報告書では紙幅の都合上、反乱の詳細は省略し、フェルモの反乱の特徴についてまとめたい。八聖人戦争の開始からリナルド・ダ・モンテヴェルデの処刑に至るまでの間に、フェルモの蜂起は 3 度生じている。これらの反乱の過程においては、ポポロは自らの利害に応じてポデスタを排除又は招聘しており、反乱においてもポデスタを通じた都市や州を超えた連携に意味があったことを示唆する。フィレンツェの煽動によって開始した一連の反教会国家反乱であるが、その後の方針転換においても諸都市間の地域を超えた連携が存在しえた可能性がある。

次いで指摘しうるのは、ローカルな反乱が広域化しえたもう一つの要素として、リナルドのような移動する傭兵隊長の存在と、彼らの現地とのつながりがあったことである。リナルドはメルチェナリオ時代からの連続した利害と人的関係も一部フェルモとフェルモのコンタードに維持したまま、追放により移動し、傭兵隊長としてフィレンツェに派遣されて現地に戻ってきたと考えられる。八聖人戦争の継続中、彼はベルナボ・ヴィスコンティの傭兵隊長兼フィレンツェ・ベルナボ同盟の軍指揮官として行動していた。講和後は教皇との和解を目指したフィレンツェとフェルモはリナルドに敵対し、不都合な存在になった彼はフェルモと近隣の都市や領主との同盟によって排除された。しかしその過程で、フェルモを掌握したリナルドは自らのローカルな利害に基づく行動もとった。このような人物は、一人の人間の中にローカルな要素と超地域的な要素を併せもっている。現地に通じ、現地に利害と人脈、基盤を持つ傭兵隊長たちが、国家間の争いの文脈で傭兵隊長として現地に投入され、その任務を果たすと同時に並行して現地での自らの争いを展開したと考えられる。

移動する傭兵隊長の存在は、小シニョーレ達が多数出現し、激しい政争と追放劇を展開したマルケのような地方の特徴と言えるかもしれない。加えて、フェルモにおいては、コンタード内の小領主や小中心地への都市のコントロールが及ばず、都市のコンタード支配を著しく欠いていたことを大きな特徴として指摘することができる。それ故にポポロの政府や小貴族によるシニョリーアの激しい入れ替わりを経験した。このような都市の転変の激しい政局と内部分裂と、リナルドのような都市内部の一要素でもある移動する主体の結合に、フェルモが広域的反乱に接合する要因の一つがあったのではないかと考える。

（2）さらにフェルモのローカルな現実を明らかにするため、フェルモ国立古文書館とフェルモ市立図書館を中心に未刊行文書と文献調査を行った。この調査の過程で、1370 年代前後の反乱

と財政の関わりを示唆する一連の文書が存在することが明らかになった。そこで、八聖人戦争期前後の反乱と財政の関わりに注目して研究を進めた。

この時期、反逆者とされた人物に対する最も一般的な対応は、財産の没収と追放であった。それが具体的にどのように実行され、教会国家と都市コムーネ・フェルモがそれぞれどのように関わり、いかなる帰結をもたらしたのかを、フェルモ国立古文書館(Archivio di Stato di Fermo［以下 ASFe］）所蔵史料を中心に検討した。

既述のように、フェルモを含むマルケ地方は、無数の中小シニョーレ達の存在によって都市を中心としたコンタードの統合性を著しく欠いていただけでなく、都市とコンタードを超えた領主間同盟の発達した網の目を持っていた。従って、このような地域においては、反乱による財産没収が領域構造を変動させ、人と財産の移動と淘汰をもたらしたと考えられるのではないだろうか。

では反乱者の財産没収は、具体的にはどのような制度を用いてどのような手順で実行され、どのように管理されたのだろうか。反乱者から没収された財産は、教皇官房に収納された。これらの没収財産の売却に当たって、購入者を探す方法の一つは競売であった。そして没収財産の購入者候補としてはしばしば都市や農村のコムーネが登場する（例えば ASFe, Fondo diplomatico, n. 2147 Hubart）。教皇官房による反乱者からの財産没収からの最大の受益者はコムーネであった可能性がある。

とは言え、教皇官房を介した転売による財産移転の規模と意義の評価には今少し慎重になる必要もある。貴族による買戻しの権利を保証している事例も存在するからである（例えば ASFe, Fondo diplomatico, n. 1631 Hubart）。この場合実態としては、買い戻すまでの間コムーネが間に入り、没収財産を担保に貸し付けを行ったということに等しくなるだろう。このような没収財産の転売と移転に関連する動向には、都市コムーネと領主達のみならず、コンタードの小さな共同体も関与した（例えば ASFe, Fondo diplomatico, n. 1690, n. 2147 Hubart）。

要するに、一方にはコンタードの中小領主と地域の共同体があり、彼らは自身の土地と権利を手放すまいと努力していた。共同体の側から見れば、没収はそれまで領主が保持していた諸権利を購入し自治を拡大するチャンスでもあったと考えられる。他方には、コンタードへの統制拡大、もしくはコンタードの貴族や共同体に対して債権を持つことによる利益の獲得を目指す都市コムーネがあった。反乱者の財産没収には、このような各種の利害が渦巻いていたのである。

コムーネは自らの経済的及び司法上の統制が及ぶ範囲を拡大するために、また自都市の市民以外によるその経済や司法上の権限の蚕食に対抗するために、反乱者の没収財産を獲得すべく努力したのではないだろうか。したがって、反乱には、反乱者の教会国家に対する対抗関係のみならず、諸都市や領主や共同体の間の利害対立も関与していたと考えることができる。

（3）本研究過程での中世後期の統治と政治的抵抗の理念についての研究成果は、アルプス地域の事例研究と、日本史との比較研究にも反映させ、論文として公表した。

（1）（2）の研究成果については、現在学術論文と学会発表を準備中である。さらにフェルモ国立古文書館所蔵史料群を中心に、上記（1）（2）の成果と総合した 14 世紀フェルモ政治史と経済史から、広域的反乱の背景となった地域を超えた動向とローカルな動向の相互関係をより多面的に明らかにすることを展望している。今後の新たな研究計画を作成し研究を進めたいと考えている。

＜引用史料＞

・Archivio di Stato di Fermo, Fondo diplomatico, n.1631, n.1690, n.2147 Hubart.

・*Cronaca fermana di Antonio di Niccolò notaro e cancelliere della città di Fermo dall'anno 1176 sino all'anno 1447*, in *Cronache della città di Fermo, pubblicate per la prima volta ed illustrate da G. De Minicis vice presidente della R. Deputazione di Storia patria per le provincie di Toscana, dell'Umbria e delle Marche, colla giunta di un sommario cronologico di carte fermane anteriori al secolo 14 con molti documenti intercalati*, a cura di M. Tabarrini, Firenze, 1870.

＜引用文献＞

・S. K. Cohn, Jr., *Lust for Liberty. The Politics of Social Revolt in Medieval Europe, 1200-1425. Italy, France, and Flanders*, Cambridge-Massachusetts, London, Harvard University Press, 2006 (paperback edition 2008).

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 佐藤公美	４．巻 265
２．論文標題 分裂した共同体の抵抗――15世紀ヴァリスのラロン事件における政治言語――	５．発行年 2018年
３．雑誌名 西洋史学	６．最初と最後の頁 1－21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　1件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 佐藤公美
２．発表標題 コメント
３．学会等名 悪党研究会シンポジウム「南北朝『内乱』」（招待講演）
４．発表年 2017年

〔図書〕　計1件

１．著者名 悪党研究会、市沢哲、廣田浩治、徳永裕之、佐藤公美、蔵持重裕、渡邊浩史、山野龍太郎、牡丹健一、徳永健太郎、渡邊浩貴、小林一岳	４．発行年 2018年
２．出版社 岩田書院	５．総ページ数 289
３．書名 南北朝「内乱」	

〔産業財産権〕

〔その他〕

研究者詳細－佐藤公美ー甲南大学 http://researchers.adm.konan-u.ac.jp/html/100000340_ronbn_1_ja.html 佐藤公美－研究者－researchmap https://researchmap.jp/hitomi_s/ Hitomi Sato | Konan University-Academia.edu https://konan-u.academia.edu/HitomiSato

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考